

## 講義 1 : 子育て期のストレスとサポート資源

—港区の母親調査からわかること—

講師 野沢慎司 (本学社会学部附属研究所所長/  
社会学部教授)

私は、社会学部社会学科で家族社会学を主に担当している野沢です。同時に、現在社会学部附属研究所の所長もしています。日頃研究所の事業にご協力いただき本当にありがとうございます。この場を借りて感謝申し上げます。

本日のテーマ「子育て支援は贅沢か」ですが、私自身は、必ずしも子育てそのものについて中心に研究してきたわけではありませんが、今から7年前の2001年に、港区の保育園と幼稚園に協力いただき、お母さんたちの子育ての様子を調査しました。その調査では、「育児不安」という言葉で表されるような心理的な状態を尋ねた質問がいくつかありました。それを中心に、どういう条件にあるお母さんたちがストレスを感じやすいか、あるいは逆に、どういう条件が整えば、それを感じる事が少なくなるかということ进行分析しました。その結果を紹介したいと思います。

実は、数年に1回この授業を担当することになっており、今年もまた私の実習の季節が巡ってきました。この4月から学生たちと一緒に、調査を始めようと計画をたてています。またこの4月から本研究所に関わることになった経緯もあり、特に港区に焦点をあてて今年も調査を実施したいと思っています。すでに、本日参加されている方々にもお話を聞かせていただきながら、港区の状況を研究しているところです。今日のテーマに関心のある皆さんにお集まりいただいているので、これを機会に学生たちと一緒に皆さんにいろいろ教えていただく機会をつくっていただけたらとお願いする次第です。

私は、今日のテーマ「子育て支援は贅沢か」に直接答える力がありません。この点については、後から登場する松原先生がズバリ提言されると思いますので、私の役割としては、先ほどの調査データを使いながら、港区のような都心における有効な子育て支援策はどんなものかを考えるヒントとなる情報を提供できればと考えています。

しかし、それ自体もなかなか難しいのです。今回改めてデータを分析し直してみても、ズバリという結果が出ているわけではありません。2001年の調査では、練馬区の光が丘という団地、大江戸線が通った非常に大規模な団地ですが、そこでも同時に調査をしました。練馬区は、大都市東京23区の一部ですが、ちょっと都心からは離れています。性格の違うこの地域と、港区のような都心地域を比較してみようと思いました。そうすれば、港区の特徴が少しははっきりと見えてくるかもしれないと思います。

### 人間関係ネットワークの視点から見た都心居住

私の得意分野は、家族や子育てに限らず、いろいろな問題を人間関係のネットワークと

いう視点で考え、調査し、研究することです。ネットワークという言葉は、今はやりの言葉であり、いろいろなところで使われています。人間関係の形（「構造」ともいいますが）を全体として捉えて、それがどういう特徴をもっているかを考察します。また、その人の持っている意識、考え方、行動にどう関連し、どんな影響を及ぼすかを考えます。私たちは、いろいろな人との関係を持っているのですが、その一本一本の関係は目に見えないわけです。例えば、「将来結婚する相手とは、小指と小指が赤い糸で結ばれている」という言い方することがあります（見えないはずなのに何故赤い糸なのかはよくわからないのですが…）。それと同じように、糸でいろいろな人と結ばれている様子を線で描いてみようというわけです。そのように、将来結婚する相手だけではなく、日ごろつきあっている友だち、家族、職場の同僚たちとの関係を、図に描いて線を引いてみるとどんな形になるでしょうか。たいていは、網みたいなものになります。友だち同士も友だちであれば細かい網の目になってきます。その網の目がどういう形になっているか、大きい網の目なのか、小さい網の目なのか、ということを見ていくことでネットワークの構造が捉えられるのです。

そのネットワークと、子育てをしているお母さん、お父さん、その他の人たちが感じるストレスと、何か関連があるかということを見ていきたいと思います。ネットワークで結ばれている人たちとの間には、いろいろなやりとりがあります。基本的には、支えたり、助けたりということです。ストレス、悩みがあるとすると、その悩みを聞いてあげるとか、手を貸してあげるといったことです。そういうサポート・ネットワークがどんな形であり、それをどう利用すれば、私たちのストレスとか、悩みが改善されるのか、よりハッピーな子育てになるのかということがテーマです。

## 大都市に暮らす人々のネットワーク

港区のような大都市がテーマですから、都心に暮らしている人たちはどういうネットワークを持っているのか、子育てに限定せずに、その点について最初に考えてみます。

大都市というのはどういう場所か——ひとつの常識的なイメージは、大都市はコミュニティが崩壊している場所、人間関係があまりない所というものでしょう。現代は人間関係が希薄化している、家族の絆も弱くなってきていると一般的に言われますが、特に大都市ではそうであるというイメージが強い気がします。社会学の研究では、そうとばかりとは言えないのではないか、必ずしもそんなことはない、と主張する研究が出てきています。ネットワークについての調査もずいぶんされており、大都市に住んでいると孤独になるかという、全然そんなことはないという事実が基本的に確かめられています。

ただ、どういう絆をもっているかを見ると、田舎の小さな町に住んでいる人と、大都市に暮らす人とではずいぶん違いがあるということもわかってきています。それは、ひとつは大都市というのは、やはり大量の人口が集中している場所ですから、その中にはいろいろなタイプの人が含まれています。私たちはその人たち全員とつきあうわけにはいきません。小さな村でしたら、全員が知り合いということもあり得ますが、大都市はそうではない。

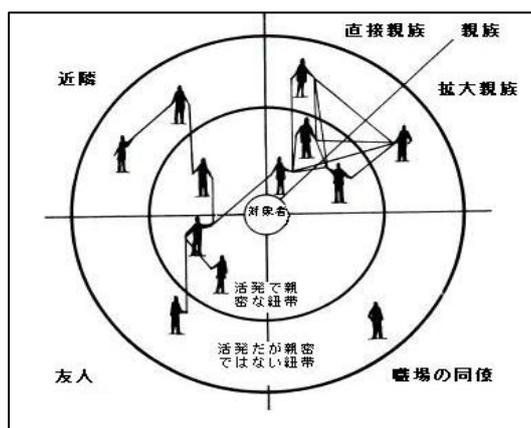
何がしかの理由で選んで、あるいはたまたまかもしれませんが、何人かの人たちと知り合  
って、友だちになり、ネットワークを作っていくことになるのです。特定の関心によって  
結びついた、同じような考え方の、似たようなものに興味を持っている人同士が結びつき  
やすい、というところに大都市の特徴があると主張する学説があります。

例えば団体ですが、サッカーに関心がある人は日本全国どこにでもいるかもしれませんが  
が、ラクロスという競技に関心がある人はそんなにいないかもしれない。でも東京でやろ  
うと思い、この指とまれと言えは結構な数の人が集まってくる。ところが、小さな村でや  
ろうとしても人数が集まらずにチームがなかなか作れないと思います。

ということは、大都市は、いろいろな団体や機会があつて、そういう意味では刺激が多  
くて楽しい、自分の居場所、自分がやりたいことをやれる場所、仲間を見つけやすい場所  
と言えるかもしれません。そういう仲間というのは、必ずしも隣に住んでいるとか近所に  
住んでいるとか、狭い意味での地域に住んでいる人たちとは限らない。東京は広くてたく  
さんの人が住んでいます、交通網がきっちりとしてできあがっていて、広い範囲の人と、日  
常的にコンタクトを取ることができる場所でもあります。なので、ネットワークで繋がっ  
ている人同士が住んでいる場所が、田舎よりも、より広い範囲に広がっていることも確か  
められています。

そういう意味で、大都市に暮らすことは、必ずしも悪いことではない。人間関係的にも、  
うまくやっていくとより楽しめる場所ということになるかもしれないのです。こういう議  
論は、クロード・フィッシャーというアメリカの社会学者が書いている『友人のあいだで  
暮らす』という本の中に出てきています。本のタイトル通り、都会人は友人中心のネット  
ワークのなかに暮らす傾向があると主張しています。

図1 パーソナル・ネットワークの視点  
現代都市居住者のコミュニティ



B. Wellman, ed.. 1999, *Networks in the Global Village*, Westview Press, p. 20.

カナダのトロント大学にいるバリー・ウェルマンという社会学者が、トロント（カナダ  
最大の都市）に暮らす人たちの典型的なネットワーク・パターンを上のような図に描きま

した(図1)。真ん中の丸が調査をした相手の方を示しています。その人が、どういう人たちと繋がっているか。中心に近い同心円の中にいる人たちが、より親密な人たち、その外側にいる人はそれほど親しくないが、日常的にいろいろ助け合い、交流がある人たちです。

この図は、4象限に分かれています。右上が親族、その上側部分は直接親族です。一緒に暮していないが、親とか子どもとかきょうだいとか、日ごろ親しくしている直接の親族が何人かいる。その右下は、拡大親族です。上記以外の、例えばおじさんとかおばさんで親しくしている人です。

直接親族に3人、拡大親族に2人、つきあいのある人がいるのが平均的な姿というわけです。さらに、この親族の人同士の繋がりがあがる場合、その間に線が引かれています。黒い糸です(笑)。これを見ると、ほとんどの人が互いに知り合いであることがわかります。親族というのは、だいたい互いに知り合いであることが多く、非常に密な、網の目の細かいネットワークになっています。

左上が近隣の人たちです。近隣にも3人くらいつきあいのある人たちがいて、そのうちの1人は親しい人ということです。ただ、近所の人全員互いに知り合いかというと、そういうことはなく、知り合い関係がないところもあります。近所の人たちは、本人の親族のことをほとんど知りません。別の領域でつきあっている人ということになります。ここにいらっしゃる皆さんの場合も、だいたいそんな感じでしょうか。しかし、親族が近所に住んでいると、近隣と親族の間に知り合い関係が多くなります。

左下が友人です。友だちが3人いて、2人は親しい友人、もう1人はそんなに親しくないけれどつきあいが活発な人です。さらに職場です。職場の同僚は1人だけいるのですが、この人は、自分の親しい人のうち誰とも直接繋がりがありません。どういうことかということ、現代人は、(トロントの人だけではなく東京に暮している私達も似たようなところがあるでしょう)ひとつのかたまったコミュニティにどっぷり浸かって暮しているわけではないのです。職場でつきあう人、近所でつきあう人、親族、それ以外のいくつかの場面でつきあいのある友だちを別々に維持しているわけです。

しかし、これがひとかたまりになっている場合もあるし、ほとんどつきあいがいないという人もいます。人によって形が違うわけです。地域によっても違いがあるのですが、ウェルマンは、一般に現代人の住むコミュニティは、地縁・血縁から解放されているという意味で「コミュニティ解放論」を主張しています。昔は「地縁」と呼ばれる近隣の関係、「血縁」と呼ばれる親族関係を中心に、私たちの人間関係ができあがり、しかもそれはひとつの集団であり、連帯して固まっている、みんながみんな知り合いだったのですが、今では、個々の関係がばらけてきて、複数の場面に分散しているという主張です。このウェルマンの図には出てこないのですが、この学説には、地理的・空間的にも相当広がった範囲にネットワークを持っているという主張も含まれています。

現代日本に関しても、データからも同様のことが言えるといえます。

## 港区民のネットワークの特徴は？

図2 地域間の近隣・友人ネットワーク比較

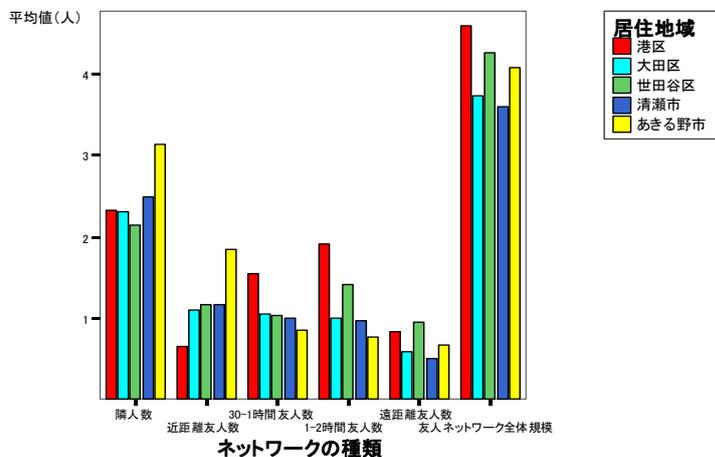
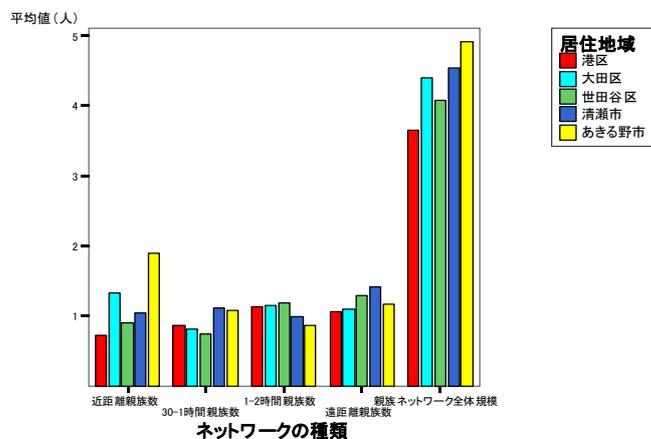


図3 地域間の親族ネットワーク比較



一般的に、都心と都心から離れた地域とでは、ネットワーク的に何か違いがあるかを見てみましょう。東京都立大学（現首都大学東京）が2000年に行った調査があります（「東京版総合社会調査（2000年）」20～70歳の東京都民が対象）。私も関わったこの調査は、東京都心の港区のほか、大田区、世田谷区、清瀬市、あきる野市、都心から離れたいくつかの地域、区・市を選んで、そこからランダムに選び出した都民を調査しました。20歳から70歳までの一般的な男女の持っているネットワークを見てみたのです。

上に示した「地域間の近隣・友人ネットワーク比較」のグラフ（図2）は、日ごろから親しく頼りにしている相手は何人いるかという人数を表しています。一番左が隣人数です。近所のつきあいは、あきる野市という東京でも都心から遠い郊外に住んでいる人たちが一

番多いです。赤い色の棒が港区を示していますが、港区の人たちの近所つきあいは、平均すると2人ぐらいです。ないわけではないのです。大田区や世田谷区、清瀬市とほとんど違いがなく、あきる野市がちょっと飛びぬけて3人超えています。距離別の友人数は、30分以内で行ける比較的近いところにいる友人数、30分から1時間くらいの距離、時間、距離の離れている友人、1時間から2時間、さらにそれより遠くに住む友人数を示しています。近隣・友人ネットワークに関しては、都心の港区民の特徴は、近いところに少ないが、東京の広い範囲で見ると、時間距離にして30分から1時間、あるいは1時間から2時間など比較的遠いところに友人が多く、全体として見ても友人が他の地域よりも比較的多いという特徴があります。

「地域間の親族ネットワーク比較」のグラフ(図3)を見ると、親族についても似たような傾向です。港区に住んでいる人は、近いところに住む親族数は少なめです。港区民は、外から移り住んだ人が多いので、家族・親族は遠いところにいる人が多いようです。

全体としてみてみると、先ほどのフィッシャーやウェルマンの説に出てきたように、親族のネットワークが小さめになり、さらに近所つきあいも少なくなって、友人とのつきあいのほうが多い、空間的にも広がりのあるネットワークを持っているのが、東京都心・港の住民の特徴といえると思います。

しかし、子育てをしている人たちは、特に子どもが小さいといろいろな制約が生じて、遠くに住む友人とのつきあいを、どうしてもある程度断念せざるを得ないという条件に置かれています。つまり広範囲の友人ネットワークというメリットを活かせないというのが今日のテーマと関わる重要なポイントです。そして、都心のデメリットである親族関係が少なく、近所つきあひもなかなかできないという点がもうひとつのポイントです。港区のような都心で子育てする人たちは、もしかするとデメリットを多く感じやすいのかもしれない。

## 実習調査の概要

そこで、冒頭でちょっとご紹介した子育て調査の結果をみてみましょう。港区で子育てをしている人たち全体を代表するような方々への調査はできませんでしたので、区立の保育園・幼稚園の4歳児・5歳児クラスの子どもたちのお母さんに、主に答えていただくアンケート式の調査を行いました。お母さんに限定しなかったのですが、子育てをしている人に、とお願いしたら、結局ほとんどお母さんたちに答えていただくことになりました。父親が答えてくれた人は2~3人で、その他には祖母が1人でした。結局、お母さんに限定して分析をしました。

表1 2001年度実習調査の概要

- **対象者**：港区と練馬区の区立保育園・幼稚園の4歳児・5歳児クラスに在籍する子どもたち(満4歳~6歳)の母親
  - **調査方法**：保育園・幼稚園の先生から保護者に調査票を配布し、郵送で回収。
- 実施期間**：2001年10月

表2 協力施設別の協力者数

主に高輪地区の区立保育園・幼稚園

	配布数	有効回収数	回収率
3 保育園合計	115名	(73	63.5% )
3 幼稚園合計	119名	(74	62.1% )
<b>合計</b>	<b>234名</b>	<b>(147</b>	<b>62.8% )</b>

\*練馬区光が丘では：配布数269 有効回収数186 回収率69.1%

港区での調査は、本学の近くで協力していただけたところを探し、おもに高輪地区の保育園・幼稚園にお願いし、調査票を配りました。一方で、練馬区光が丘でも調査しました（調査の概要については上の表1と2を参照ください）。以下では、おもに港区の結果を紹介したいと思います。比較のために練馬区のデータも紹介します。

### 調査対象家族の特徴

表3 港区の対象家族の特徴

- 平均年齢:35.4歳 (26-45歳)
- 平均区内居住年数:8.0年 (0-40年)
- 妻の学歴:大学卒3割、短大5割\*
- 夫の学歴:64%が大学卒
- 夫の平均年収:約700万円\*
- 本人の平均年収:約170万円\*

\*港区が練馬区よりやや高い

調査に協力いただいた方の世帯特性を表3に示しました。港区でご協力いただいた方々の平均年齢が35歳で、26歳から45歳までの幅があります。これは練馬区の光が丘もほぼ同じでした。区内での居住年数は平均8年で、練馬もほぼ同じでした。ただし、どちらの地区でもばらつきがかなりあります。

両方の地域ともに全国的に見ると高学歴だと思います。妻の学歴、お母さん方の学歴は、練馬よりも港区の方がちょっと高かったのですが、夫の学歴はほぼ同じで、約65パーセントが大学卒でした。そして、高収入の世帯が多いですね。妻は、働いていない人も多く、平均170万円くらいでした。これもちょっと港区の方が高かったと思います。

お母さんたちの就業状況ですが、これは両区ともほぼ同じです(図4)。調査票を幼稚園と保育園にほぼ半分ずつ配っているのので、専業主婦の方がほぼ半分ふくまれています。保育園に子どもを預けているお母さん方は仕事をしている方が多く、フルタイム就労の人が23パーセント、4人に1人で、自営業の人も1割くらいいます。

図4 自分（母親）の就業状況（港区）

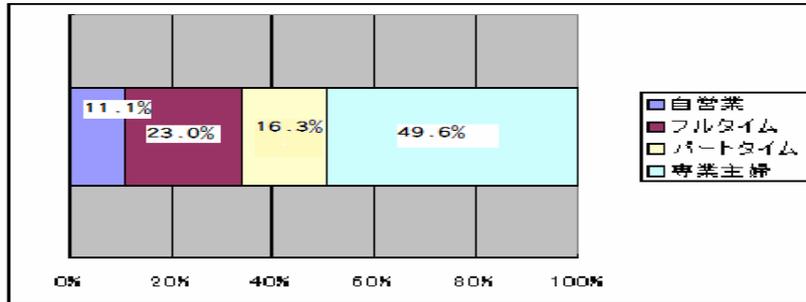
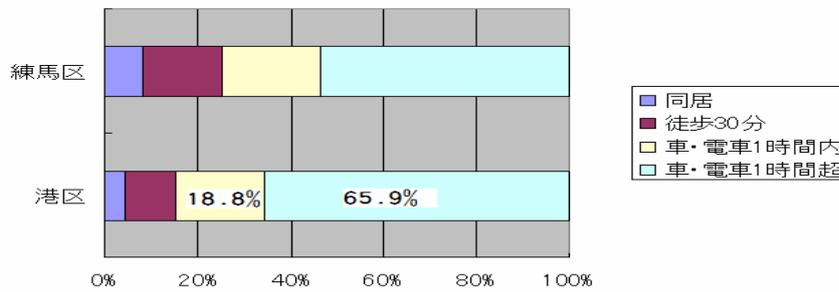


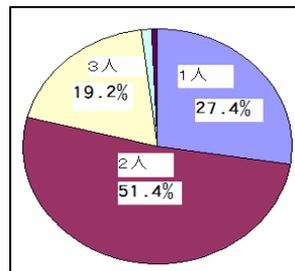
図5 自分の母親の居住場所



ひとつ重要なポイントになるのが、特にお母さんたちが働いていて子どもがいる場合に、自分の母親、子どものおばあちゃんがどこに住んでいるかです。いざというときに助けになるのが子どものおばあちゃんです。孫のためなら何でもするという人は結構多いと思います。地方都市や農村部では親と同居している人が多く、そうでなくてもおばあちゃんが近くに住んでいることが多いのですが、港区では親や義理の親と同居している人はごく少数で、そういう意味では核家族世帯が多数派です（図5）。65.9パーセントの人が、車か電車で1時間以上かかる遠い場所に自分のお母さんが住んでいます。これは、先ほどの一般的な港区民のネットワークの特徴と重なりますが、親族が遠くにいるということです。

図6 子どもの数（港区）

平均2.0人（練馬区もほぼ同じ）



子どもの数が平均して2人というのは、両区とも変わりありません（図6）。1960年代からほぼ一貫して全国平均2人でそんなに変わっていません。最近少子化が叫ばれ、最近急にひとりっ子が増えた印象があるかもしれませんが、それは間違いですね。このデータもそれを裏付けています。

## 育児不安度を規定するのはどんな要因か？

表4 育児不安の尺度

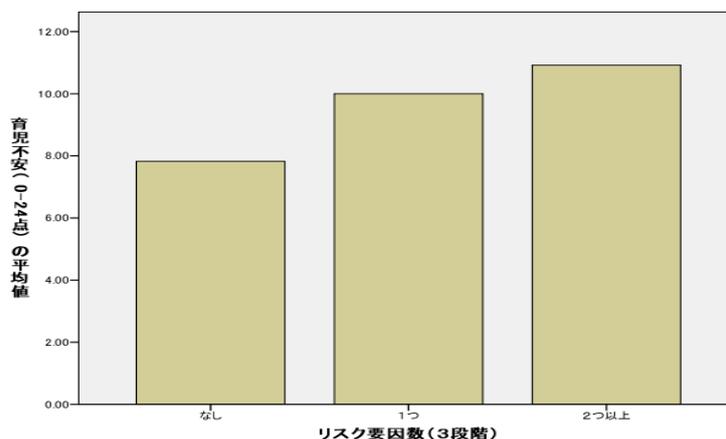
- (a) 子どものことがわずらわしくてイライラする
- (b) 子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある
- (c) 自分は子どもをうまく育てていると思う (逆転)
- (d) 自分1人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう
- (e) 毎日毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う
- (f) 子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う
- (g) 子どもが無事に育つかどうか心配で仕方がない
- (h) わが子が、他人の子より劣っているように思える

表5 育児におけるリスク項目

- 1. 病気がちである
- 2. 反抗期である
- 3. いうことを聞かない
- 4. すぐにぐずる
- 5. 双子である
- 6. 未熟児である、発育・発達に遅れがある

図7 育児リスク要因数と育児不安度 (港区)

練馬区でもほぼ同様



育児不安については、1980年代から研究の蓄積があり、それを踏襲した質問項目を使って尋ねています。表4に挙げた8つの質問をし、どれくらい当てはまるかを4段階の選択肢で答えてもらい、点数を与えました。各問いに対する答えの点数を足し上げて「育児不安度」という尺度を作りました。この点数が高い人は育児不安が強い人です。これが非常に高くなると、場合によっては虐待などに繋がるリスクも高くなると思います。

一方、それとは別に、子育てをするのが難しいという状況にあるかどうかを知りたいと

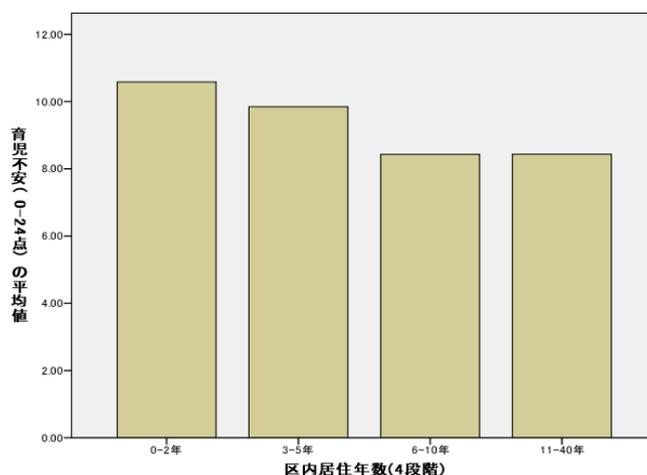
思い、これも既存研究の項目をそのまま使って「リスク要因数」という尺度を作りました（表5）。例えば、その子が病気がちであるかどうか。自分の子はすごく病気が多いという場合は、これに丸をつけてもらう。リスク項目が多い人とまったくない人では、育児不安度もずいぶん違うだろうと予想されます。

### 育児リスク要因

そこで、育児リスク要因の数が多いか少ないかと、育児不安度の高さの間の関連をみました（図7）。練馬区も同じような傾向でした。リスク要因が多い人、2つ以上ある人は、育児不安度の点数が高くなるという傾向がまず確かめられました。

図8 港区居住年数と育児不安度（港区）

港区のみで関連が強い



次に港区における居住年数についてみてみましょう（図8）。長く住んでいる人は、あまり育児不安を感じないのです。最近港区に移り住んできた人、移り住んできてまだ2年未満の人は、特に育児不安度が高いです。これが、6年以上になるとかなり低くなって、安定します。ただし、住み慣れない場所で育児不安度が上がるのは港区に特徴的な傾向です。

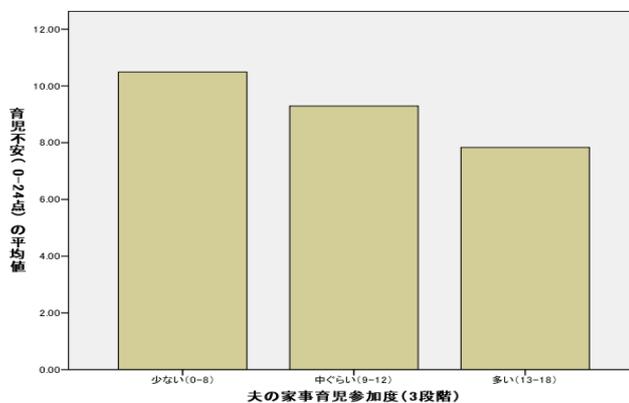
### 夫の家事・育児参加度

表6 夫の家事・育児参加度

- (a) 子どもの遊び相手になる
- (b) 子どもの身の回りの世話をする
- (c) いけないことをした時にしかる
- (d) 幼稚園・保育園に子どもを送り迎えする
- (e) 料理をする
- (f) 掃除をする

図9 夫の家事・育児参加度と育児不安度（港区）

→港区で関連が強い



こうした不安を和らげてくれる要因としては、周りからの手助け・サポートがあるかどうか重要です。高度経済成長期は、お母さんには母性がある、子育ては母親ひとりやって当然、それだけの力をもっているはず、本人もできるはずと考える傾向が強かった。母性に対する期待あるいはイデオロギーが強まった時期だと思います。そのおかげで、ひとりではできずと頑張りすぎてしまって、逆にうまくいかないという状況があることが、だいぶ後になって研究されて明らかにされました。育児というのは、母親であってもひとりで完璧にできるものではない、うまく子育てをやっている人は、実はいろいろな人の力を借りながら育児をやっているということがわかってきました。

そういう意味で、夫は重要な助っ人であるはずです。いえ、助っ人ではなく、妻と一緒に同じくらいやるのが当然というのが最近のイデオロギー、価値観になってきていると思います。「子育てしない男は父親と呼ばない」という政府のキャンペーンもありましたから、今のお父さんたちは、かなりやるようになってきているのかもしれませんが、家事と育児をどれくらいやっているかを聞いてみました。表6に挙げた6つの項目です。

はじめの4つが育児に関する項目（子どもの遊び相手になる、身の回りの世話をする、叱る、送り迎えをする）です。そのあとの2つが、家事についての項目（料理をする、掃除をする）です。どれくらいやっているかを選択肢で尋ねて、点数化しました。家事をよくやってくれる夫を持つと、妻の育児不安度は下がるだろうと予想しましたが、予想通りになりました。よかったなあという感じでした（笑）。

私も父親のひとりとして、なるほどと思いました（少し反省もしました）。これは、点数が少ない夫（0点から8点）の妻／母親の育児不安度は高くなり、逆に夫の家事・育児参加度が高いほど、妻の育児不安度は下がる傾向があります（図9）。夫が13点以上という合格点（？）をとっていると、妻の育児不安度は特に低いです。

### 情緒的サポート

表7 情緒的なサポート 夫／親族／非親族（園の先生以外で子育てを頼っている人）

- (a) 子育てについて助言やアドバイスをしてくれる
- (b) 子育てについての心配事や悩みを聞いてくれる
- (c) あなたの子育ての努力を理解してくれる

図10 親族からの情緒的サポートと育児不安度（港区）

→港区では（練馬区同様）あまり大きな関連はない

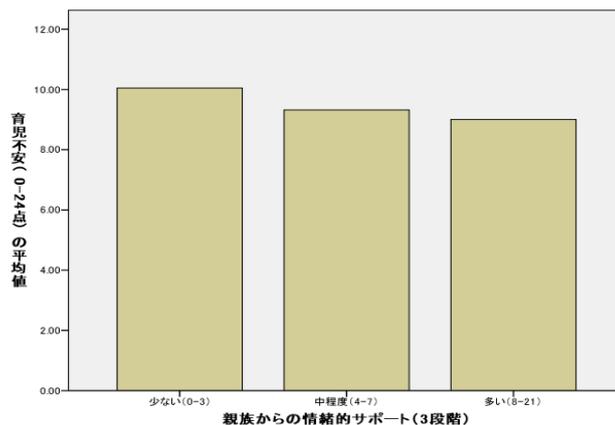


図11 非親族からの情緒的サポートと育児不安度（港区）

→港区のみで関連が強い

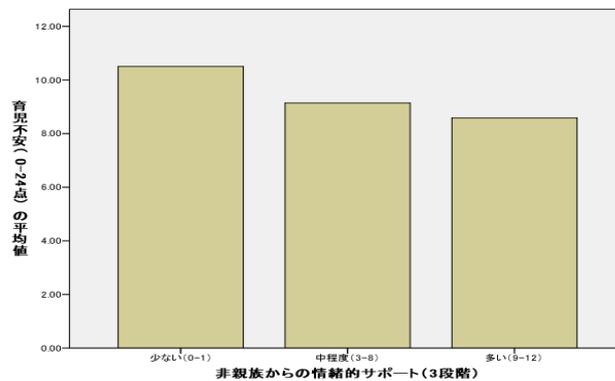
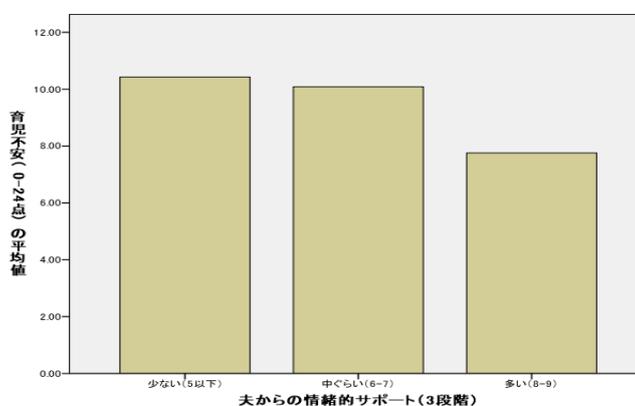


図 12 夫からの情緒的サポートと育児不安度

→港区でやや関連が弱い



調査では、情緒的なサポートについても尋ねています。例えば、夫について、「あなたの夫は「子育てについて助言やアドバイスをしてくれるか／子育てについての心配事や悩みを聞いてくれるか／育児の努力を理解してくれるか」ということを訊いています。さらに、それ以外の親族（あなたのお母さん、お父さん、きょうだい、夫のお父さん、お母さん、きょうだい）、にそういう人はいますかということも聞いています。さらに、それ以外の親族についても尋ねています。その7つくらいのカテゴリーの親族について、情緒的なサポートをしてくれる人がいるか、いないかを尋ねました。

さらに親族以外の人（幼稚園・保育園の先生は除く）、自分の個人的な知り合いの中で、子育ての面でいろいろ頼りにしている人を最大4人まで挙げてもらいました。その4人は、上記の情緒的サポートをしてくれるかどうかを尋ねました。つまり、夫、親族、非親族の人たちが、どういう情緒的なサポートをしてきているか、その程度を点数にしたわけです。

まず親族について、自分の母親などの親族からの情緒的なサポートは、全体として、たくさんの方がいろいろなことをしてくれれば点数が上がるように設定した尺度を作ったわけですが、港区では、育児不安度との大きな関連はありませんでした（練馬区も同様でした）。そもそも大都市では、この違いが生じるほど近くに親族があまりいないということかもしれません（図 10）。

次に、育児に関して頼りにしている4人までの非親族から、情緒的サポートを受けている程度と育児不安度との関連をみてみました。すると、練馬ではあまり関連がないですが、港区ではより強い関連がでました（図 11）。これはひとつの発見です。都心の方が非親族からの情緒的サポートの効果が強い。友だちや仲間を作って、その人たちと情緒的に支えあえる、アドバイスしあう、情報交換するということは都心でこそ重要であり、それができないと育児不安度が高まってしまうということを示唆する結果になりました。特に非親族ネットワークからの情緒的サポートが少ない（0点から1点）人は、育児不安度が特に高くなる傾向があります。

最後に、夫／お父さんからの情緒的サポートの効果はどうなのでしょう。育児に関する妻のいろいろな苦勞を聞いたり、理解してくれたり、情緒的な面でも関わっているかどうかは妻の育児不安度に関連しているのでしょうか。これは、逆に港区でやや関連が弱いという結果になりました（図 13）。ただし、特にそういう情緒的サポートを夫から受けていると感じる妻は、やや育児不安度が低くなるという傾向はあります。

## 重回帰分析による検討

表 8 育児不安度を説明する重回帰分析

従属変数=育児不安度 独立変数	港区	練馬区
	$\beta$	$\beta$
区内居住年数	-.214 *	-.092
リスク要因数	.335 ***	.504 ***
夫の家事育児参加度	-.191 *	-.143 *
非親族からの情緒的サポート	-.267 **	.009
親族からの情緒的サポート	-.026	-.096
決定係数 ( $R^2$ )	.271	.280
調整済み決定係数 (Adjusted $R^2$ )	.237	.265
$F$	8.31 ***	12.34 ***
N	118	158

注: \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ .

では最後に、重回帰分析という多変量解析の手法で、今挙げたいくつかの要因のうち重要そうな要因をピックアップし、同時にひとつの分析にかけて、どの要因がより重要なかを確認してみましょう。つまり、他の要因の影響をコントロールしたうえで、他の要因とは独立にどれくらいの影響をもっているのかを見るための分析方法です（表 8）。重回帰分析の表のうち、 $\beta$  という係数の値に注目してください。この値が大きければ大きいほどその独立変数の従属変数（育児不安度）に対して与える効果が大きいということです。マイナスがついている数値は負の効果を表しています（独立変数の値が大きくなるほど育児不安度は小さくなる）。ついていないのはプラスで、正の効果です（独立変数の値が大きくなるほど育児不安度も大きくなる）。\*印がたくさんついていると統計的に有意な効果ということになるので、ひとつの目安になります（つまり黄色のマーカーの部分に注目してください）。

例えば区内居住年数の効果を現す  $\beta$  の値、港区だけ数字が大きくなっていますが、-.214 ということです。これは負の効果ですから、港区内に長く住めば住むほど、育児不安度が下がることを示しています。港区内に長く住んでいる人ほど、育児不安度が低いという効

果は、練馬区にはほとんど見られないのに港区にはみられる、ということがわかりました。リスク要因が多いと育児不安度が高まるというのはプラスの効果です。これは港区も練馬区も同じようにあります。夫の育児参加度の効果も、港区、練馬区とも同じようになり、夫が家事育児をやってくれば、妻の育児不安は和らいでいくという傾向です。非親族からの情緒的サポートは地域差があり、何故か、練馬区ではあまり効果がみられません。歴史のある団地に住んでいると、自動的にみな友だちになるため効果が出にくいのかもかもしれません。港区だと、新しい友人（ママ友）がうまく作れるか作れないかによって、育児不安度がずいぶん違ってくようにみえます。親族からの情緒的サポートの効果は、特に他の要因の効果をコントロールしてしまうと、練馬区でも港区でも小さくなってしまい、特に港区ではほとんどないと言ってよいです。

## 調査結果のまとめ

以上の分析結果をまとめてみると、両区に共通しているのは、子どもが病気がちとか、問題を抱えているなどのリスク要因が多いとお母さんの育児不安度が高まる。これはよく理解できる、常識的な点だと思います。父親が家庭、子ども、家事に関わってくれるほど妻の育児不安度が下がります。これも、ある程度普遍的な現象かもしれません。

ただし、港区では、少なくとも練馬区とは違う独自の要素があります。居住歴の効果です。港区では、新しく移り住んできた人たちがストレスを強く感じる傾向があります。光が丘のような比較的古い団地だと、団地ができた当初に比べて最近子どもが減ったとは言え、まだ子どもの数も多いようにみえました。そうすると、長年住まなくても自動的に非親族的なネットワークができやすい地域社会ができているのかもしれないです。これはさらに追究してみる必要がある問題です。少なくとも都心の港区、調査をした高輪地区では、移り住んできた当初は、なかなか人間関係を作りにくいのかもかもしれません。つまり、移り住んできた当初に新しい人間関係を作ることが港区での子育てにおける重要な課題なのかもしれません。

## 港区における育児サークルの効果

最後に、今まで取り上げてなかった要因について取り上げてみます。調査したお母さんたちが、育児サークルのような団体に参加しているかどうかを質問項目にいれました。それへの回答によって、回答者のお母さんたちは、全然参加していない人、今参加している人、今は参加してないけど以前参加していたことがある人の3つのグループに分かれます。

子育てサポートの非親族ネットワークの規模（大きさ）については、子育てでいろいろ頼りにしている親族以外の人を4人まで挙げてもらいましたが（なかには、全然いないという人や1人だけという人もいました）、さらに4人以上いる場合は、その全体の数を回答してもらいました。ここではその全体の人数を非親族ネットワークの規模としています。

図 13 港区における育児サークルの効果

①非親族ネットワークを拡大する？

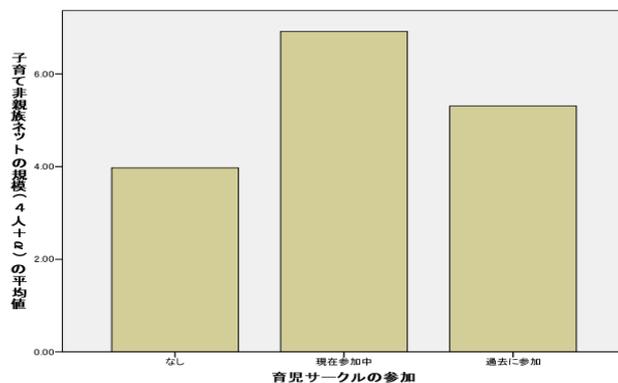
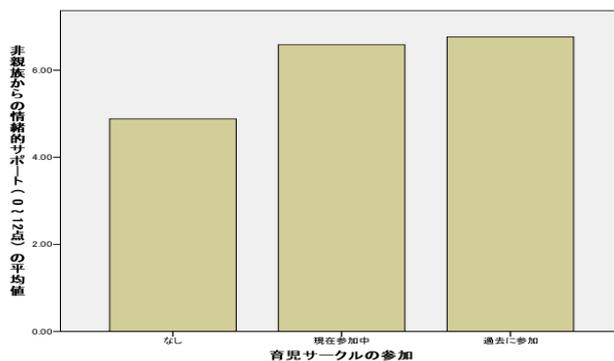


図 14 港区における育児サークルの効果

②非親族からの情緒的サポートを増やす？



サークルに参加していない人は、子育てを頼れるネットワークの大きさが、平均して 4 人程度であり、現在参加している人は 7 人くらいになります。ずいぶんと人数に差があります。過去に参加したことがある人は、その中間くらいですね。あえてグループに参加するということが、当然といえば当然ですが、仲間が増えることがわかります (図 14)。

仲間が増えるだけでなく、そのできた仲間どうしでの情緒的サポートを交換する量についても調査からわかります。これもサークル参加状況によって違いがあり、参加経験がない人と、現在あるいは過去に参加した経験がある人との間に差があります (図 15)。過去に参加したことで、情緒的サポートするような相手とのネットワークが形成され、少なくともそのうちの何人かとのつきあいが存続しているのだらうと思います。要するに、グループに参加することによって関係が広がる、関係が広がってサポートが手に入るため、育児のストレス/不安度が低減する効果が生まれるのではないかと推察します。

## 港区の人口変動

港区の、特に芝浦港南地区は、高層マンションも次々に建設されて、新しく移り住んで

いる人たちが多く、子どもを育てている人も多いです。統計によると2005年から2007年の2年間で、5歳未満の子どもの数がほぼ倍増しています。地域の人口比率の中で、小さい子どもが占める比率も、かなり急激に上昇していることがわかっています。幼い子どもを育てている世帯の増加が、港区の中でも特定の地域に今集中しているのです。私たちが調査したのは、もう7年前ですので、今例えばこういう地域に着目してみると、私たちが発見したことが、より当てはまるのかもしれませんが。最近移り住んできた人たちが、新しくいかに人間関係を作れるかによって、作れた場合にはよりハッピーな状態で子育てをやっていけるけれども、それが何かの理由でうまくいかないと、不安を抱えながら育児をするということになりやすい。そういう層が、もしかすると増大しているというのが、今の港区の状況なのかもしれません。

## 結 論

最後にまとめとしては、港区のような都心で育児のストレスを避ける、ストレスをできるだけ緩和する形で子育てをするために重要なのは、サポート源、サポート資源としての友人・仲間です。親族は周りにあまりいないのですから、それを無理やり増やすことは難しい。遠くにいるお母さんに電話で相談することはできますが、身近な環境のことをなかなか共有してもらえないわけです。身近な状況を理解しあえて、直接会って話しができるような仲間を作ることが育児にとっては重要です。先ほど示したように、サークルに入っているということが、そういう関係形成の機会を増大させるということがわかっていますので、サークル等に参加する、参加しやすくする、あるいは、しやすい団体が周りにたくさんあるということを情報として広めることが重要なのかもしれません。そうしたサークルのなかから、自分にぴったり合うところがうまく見つければ、友人ネットワークを拡張できるでしょう。手前味噌ですが、明治学院大学の社会学部附属研究所も、このところそうしたグループやサークル活動を支援する実践活動をやってまいりました。そうした支援は、港区のような都心地域にとっては、的外れなことではない、いや、かなりの的を射ているのではないかと、今回の再分析の結果から、ちょっとだけ自信を深めた次第です。

以上がとりあえずの結論です。ご静聴どうもありがとうございます。